

〈 連載(283) 〉

## 「にっぽん丸」の「飛んでクルーズ沖縄」に乗船



大阪府立大学21世紀科学研究機構  
特認教授 池田 良穂

定年退職した記念に、クルーズ客船「にっぽん丸」による沖縄周辺の離島クルーズに乗船した。商船三井客船の運航する美食の船「にっぽん丸」は、邦船としては初めて、飛行機と船旅を組み合わせたフライ&クルーズで、かつ同じ港から定期的にクルーズを行う定点定期クルーズを行ったことは周知の通りで、北海道小樽を起点とする「飛んでクルーズほっかいどう」により、幅広いクルーズ客層の拡大に大いに貢献をした。この「にっぽん丸」が、日本各地の都市から那覇空港まで飛行機で移動して、那覇港起点のクルーズに乗船する「飛んでクルーズおきなわ」を4月上旬から実施しており、ちょうど定年直後の時期でもあってその内容を物色していたところ、その中でも、大東島に寄港する3泊4日のクルーズに筆者の心が動いた。大東島は沖縄本島から西に300kmほど離れた絶海の孤島で、南北に2つの島から成っている。那覇からは貨客船「だいてう」が定期的に通っているが、絶壁に囲まれた島で、船からはクレーンに吊り下げられたゴンドラに乗って上陸するという。荒れると何日も帰られなくなるという

こともあるとのことで、まだ一度も行ったことがなかった。



新糸満造船で修理中の各種の船舶。左上に映るのが「フェリーざまみ」

さて、関西空港からの飛行機は、沖縄本島の太平洋側を南下して、南の海上を回りながら北上して那覇空港へと進入した。この進路をとると、着陸の直前に糸満市の上空から新糸満造船の革新的な造船所の様子が見える。以前は、離着陸時にはデジカメの撮影ができなかったが、今では写真撮影ができるようになり、古い機械式のカメラを持参しなくても自由に写真が撮れるのが嬉しい。船台の上には修理中の数隻の船が乗っており、その中には那覇と座間味村を

結ぶフェリーの姿も見えた。乗船するクルーズでは座間味島にも行くが、ドック中の「フェリーざまみ」の雄姿は島では見られないことになりそうだ。

夕刻、新しいクルーズ客船ターミナルにて「にっぽん丸」に乗船。何度も乗船したことのある船だけに、なんとなく家に戻ってきたような感慨がわく。出港前にボートドリルが行われ、続いてプロムナードデッキでの出港パーティで盛り上がる。最初の船上でのディナーは、和食会席。ただ、和食のフルコースの中にも「にっぽん丸」名物というローストビーフが、追加して頼めるようになっていた。食事の後は、落語とバンド演奏と続いた。

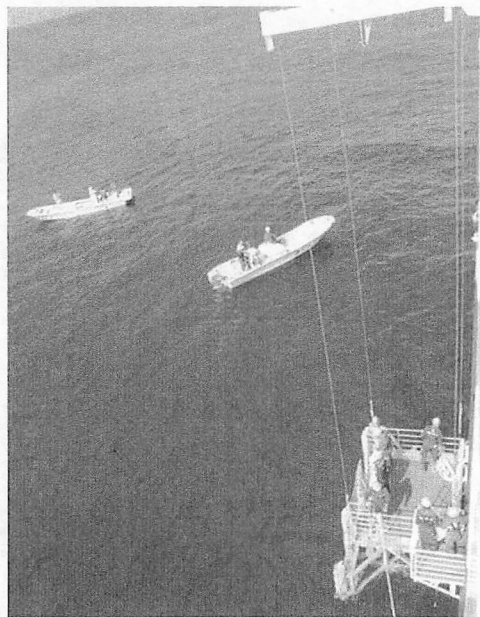
翌早朝、船は南大東島の近くを低速で航行していた。昨晚から雨模様が続いており、海も結構荒れていて、夜間の航海中はよく揺れていた。朝になってだいぶ風は収まり、海面はだいぶ納まってきていたが、昨晚の低気圧の前線通過の影響で、海面にはうねりがかなり残っていた。南大東島は大型船が着岸できる岸壁がないので、沖合に止めて本船搭載の救命艇による上陸となる予定になっていた。朝食をとりながら、窓の外の救命艇の降下作業を見ていたが、何度も救命艇を下すことが試みられたものの、その船底を波が叩くために海面に降ろすことができない。ついに午前中のテンドーサービスを諦めて、午後に再トライすることとなり、船はゆっくりと南大東島と北大東島の周りを8の字型に周遊して、海上から両島の様子を見学することとなった。

午後に再び、島の北にある唯一テンドー

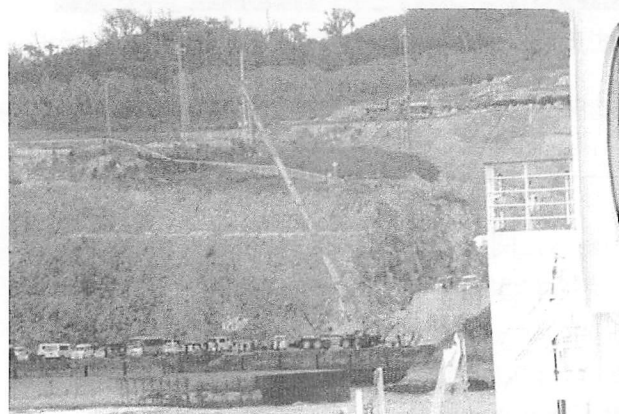
での上陸ができる港の沖に停泊して再度救命艇を下すことを試みるが再び難しく断念。その後、島からの提案で、島の遊漁船を使つての上陸を試みることとなった。慣れた遊漁船はなんなく漁港を出て、「にっぽん丸」の近くまで来られたものの、うねりの中で船側に張り出した乗下船用タラップへの接岸が難しく、ロープはとれたものの、漁船の船体は大きく揺れてとても高齢者の多い乗客を安全に乗り移らせることはできそうもない。港までの小型船での航海、そして港口付近のうねりの大きさもあり、船長は、苦渋の判断で、テンドーサービスの中止を決めた。

大歓迎で迎えようとしていた南大東島から、それでは、村の歓迎団が遊漁船で「にっぽん丸」を訪れるという提案があった。北からのうねりなので、「にっぽん丸」を島の南海域に移動させてくれば、島の南港から船に乗ってやってくるという。遊漁船は、人や特産物を岸壁上で積み込んでから、陸上のクレーンでそのまま海面に降ろすという。この光景は、船上からも見ることができた。そして次から次に遊漁船が海に降ろされては、村長以下、村の人々がやってきて、船上での歓迎セレモニー、島唄の披露、物産展などが行われた。その歓迎ぶりに感動した船客は、少しでも島の物産を購入しようと、物産展には人だかりが絶えなかった。クルーズ船で行く離島の旅は、こうした、上陸ができないという不安要素がどうしてもつきまとう。そのためには、洋上で多少の波の中でも安全に乗り移ることができるシステムの開発が必要そうだ。これは、造船学的には結構面白そうな技術課

題だ。



「にっぽん丸」の洋上乗下船台(左)と、周りに集まる南大東島の遊漁船



クレーンに吊り下げられて人ごと岸壁に挙げられる遊漁船

翌日は、国立公園にもなった慶良間諸島の座間味島に寄港で、こちらも沖合に停泊してテンドーサービスとなった。島々に囲まれた水域で「にっぽん丸」はアンカリングをしたものの、風が強く短波長の波が外界から入ってくる状況であった。「にっぽん丸」は、船体を風と波に直角に立てて、風下側に静穏な水域を作って、救命艇を下し、テンドーサービスを始めたものの、相對運動は激しく、時には乗り移ることが難しい

状況となることもあった。また、船に近づいて着船を待つ救命艇は、波に揉まれて大揺れをしており、下船を待つ乗客にはつらそうな状況となっていた。ここでは、テンドーボート兼用の救命艇については、耐航性能の向上が求められているように思う。一般に救命艇は、安全を確保するために十分な復原性能はあるものの、丸い断面形状をもつために横揺れは大きく、さらに船首が鈍頭形状のため前進時の縦揺れが激しい。

また、風に対して直角に船体を維持しているため、風圧力が大きくなり、一時走錨も発生して、錨の打ち直しをするという事態も生じた。サイドスラスター等を使って、錨にかかる力を低減する手法や、定点維持と共に、風や波に対して、テンドー乗下船システムのまわりが常に静穏水域となるようなダイナミック・ポジョニング・システムもクルーズ客船には必要そうだ。



波の中で大きく揺れながら乗客を運ぶ救命ボート

このようにクルーズを楽しみながらも、離島クルーズに実際に乗船してみると、造船技術者としてやるべきテーマが次々と見えてくるのにわくわくとしてしまった。一緒にクルーズを楽しんでいた家内は、「退職しても相変わらずの船好きだね」と、横で苦笑をしていた。



慶良間諸島の中に錨泊する「にっぽん丸」

### シップリサイクル条約の解説と実務

大坪新一郎 加藤光一 仲條靖男 成瀬健 共編著

船舶の安全な解体と環境保全の見地から、2009年5月に「安全かつ環境上適正な船舶のリサイクルのための国際香港条約(シップリサイクル条約)」が採択された。

船舶リサイクル施設での死傷事故や環境への悪影響をできる限りなくしていくには、条約の早期発効が重要である。またシップリサイクル条約を確実に履行するには、行政機関や船級協会はもとより、船主、リサイクル施設、船用機器サプライヤー、造船所、インベントリ作成専門家などの理解と準備が求められる。

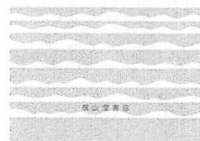
本書は、このようなシップリサイクル関係者の理解と条約発効前の準備に資するため、シップリサイクル条約の策定に直接か

かわった関係者が共同して執筆した。

さらに本書では、国際海事分野での政策研究のケーススタディとしても活用できるよう、「規制の最終結果」だけではなく、国際交渉の経緯や日本がとってきた交渉戦術、交渉に影響を与えた主要プレイヤーの立場とその変遷についても詳述している。

#### シップリサイクル条約 の 解説と実務

大坪新一郎 加藤光一 仲條靖男 成瀬健 共編著



A5判/342頁/定価 本体4,800円(税別)

発行所：(株)成山堂書店

〒160-0012 東京都新宿区南元町4-51 成山堂ビル

TEL:03(3357)5861 FAX:03(3357)5867

ご注文アドレス:order@seizando.co.jp